

〈学級経営〉

学級経営における自己肯定感の育成

—指導計画の工夫と活用を通して—

沖縄市立コザ小学校 教諭 仲 原 英 志

I テーマ設定理由

核家族化や少子高齢化の進展，利己主義の蔓延により人間関係の希薄化，家庭・地域社会の教育機能の低下，社会全体における規範意識の低下など，社会環境は目まぐるしく変化している。こうした社会環境は子ども達を取り巻く教育環境にも影響し，自分の考えに自信が持てない，他者を思いやる心や協調性が育めないといった，人間関係を構築することを困難とする子どもが増えている。

学習指導要領では，第1章第4の2（3）において，「日ごろから学級経営の充実を図り，教師と児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め，生徒指導の充実を図ること」と学級経営における人間関係と児童理解の重要性を示している。学校生活が児童にとって楽しい場となるためには，基盤である学級が児童にとって居心地のよいものでなくてはならない。また，県の学力向上主要施策「夢・にぬふぁ星プランⅢ」の取組の重点2『「わかる授業」の構築による「確かな学力」の向上推進』において「授業の基盤となる支持的風土をつくる学級経営」では「授業の中でお互いに相手のよさを認め合い，個々の考えなどが交流できるような学習集団を形成する」とある。児童相互の信頼関係や温かい人間関係を築き，自分の考えや思いを本音で語りあえる学習集団の形成が求められている。

本学級の児童は，男女間の仲がよく，各々が何事にも自分なりに頑張っているという意識で活動に取り組んでいる。学習の場においても誰とグループを組んでも比較的スムーズに学習を進めることができ，トラブルも少ない。しかし，学級集団として，個々人が協力・団結して取り組もうという意識が弱いように感じる。それは，児童一人ひとりが，周りの友達に関心を持って，深く関わろうとする意識に課題があると考ええる。また，友達とのかかわりの中で，嫌われないように相手に合わせ，集団の中で自分を出せずにいる。そのような行動は，自分に自信がなく自己を肯定できずにいることの表れだと考えられる。

これまでの学級経営を振り返ると，児童の規範意識を育むことにのみ目が行き，児童理解と実態把握のもと，的確な指導ができなかった。また，全ての児童が自分の気持ちを発表し，自分の存在の意味や価値を見い出すことができるような環境作り，児童相互の好ましい人間関係を育てる環境作りが弱かった。

自己を肯定すること，いわゆる自己肯定感を高めるためには，自分のことを知り，受け入れ，他者を認めたり，他者に認められたりすることで互いに認め合おうとする気持ちを培うことが必要である。また，学級担任が学級を一人一人の児童にとって存在感のある自己実現の場としてつくりあげることが重要である。一人一人の児童の内面に目を向けた自己肯定感測定シート（自己受容・自己存在感，他者と関係〈他者理解〉，自己理解・自己主張）による実態把握，教師と児童，また，児童相互の人間関係作りの場を意図的，計画的に設定する授業方法の工夫を通して学級を居心地のよい場所としたい。これは自己肯定感を高めることへと繋がると考える。

そこで，本研究では，児童の実態把握のため，自己肯定感測定シートの活用を通して指導計画の工夫を行うことで，自己肯定感の育成が図られるであろうと考え，本テーマを設定した。

II 目指す児童像

自他のよさを知り互いに認め合い，集団の中で自己を生かすことができる児童

III 研究目標

学級経営における自己肯定感の育成として，自己肯定感測定シートの活用を図り，指導計画の工夫を通して実践的に検証する。

IV 研究仮説

1 基本仮説

児童の学校生活の基盤である学級において、確かな児童理解に努め、指導計画の工夫と活用を行うことによって、自他のよさを知り認め合い、自己肯定感の育成が図られるであろう。

2 具体仮説

- (1) 児童一人一人の実態調査を行う場において、自己肯定感測定シートを作成、及び活用することで、より確かな児童理解ができ、指導・支援の方向付けができるであろう。
- (2) 学習計画において、構成的グループ・エンカウンターを活用した指導計画の工夫を図ることによって、自他のよさを知り互いに認め合い、自己肯定感の育成に繋がるであろう。

3 検証計画

事前に自己肯定感測定シートを活用しアンケートを行い、一人一人の児童理解と学級の実態把握を行う。その後、学級経営における自己肯定感の育成を図る視点において、手立てとなる自己肯定感測定シートと指導計画の工夫と活用における理論研究、教材研究を進める。

検証授業の段階では、自己肯定感の育成という視点で指導計画の工夫が効果的であったか、ワークシートによる自己評価や相対評価、発言を分析し、自己肯定感を育成することに繋がっているのか考察する。事後調査では、児童の変容を見るために自己肯定感測定シートによるアンケートを実施し、事前アンケートとの比較を行い、本研究の成果と課題を追及する。

V 研究構想図

次ページ参照

VI 理論研究

1 自己肯定感について

(1) マズローの欲求階層説

自己肯定感とは、「自己自身の存在に対する認識として、自己の身体的な特徴や能力や性格などについて肯定的に考えたり、感じたりする感情をさす。」(「教育用語辞典」編集委員代表 山崎英則・片上宗二 ミネルヴァ書房)と定義されている。児童が自分自身の存在を、周りの人たちとの関係の中で肯定的に捉えることができたとき、自己肯定感が高まるものと考えられる。

アメリカの心理学者マズロー (Maslow, A.H.) は、自身の『欲求階層説』において、人間の欲求を図1のように示している。彼は、「人間の衝動・動機・欲求は、それ自体は決して悪いものではなく、中性的あるいは良いものである。人間には、生得的・本能的で、基本的な欲求があり、階層的に存在している。基本的な諸欲求を適度に満たされれば、人間は停滞することなくますます成長し、心理的に一層健康になっていく」と唱えている。

また、『欲求階層説』の中において、人間の欲求は5段階に分類されるとしている。低次から順に「生理的欲求」「安全・安定の欲求」「所属・愛情の欲求」「承認・自尊の欲求」「自己実現の欲求」となっている。低階層の欲求が満たされて初めて、より高次の階層の欲求が生じると唱えた。第一階層の生理的欲求は、ほとんどの人が満たすことができるが、最後の自己実現の欲求を満たせる人はほんのわずかである。また、低次から順に4つの欲求は必要を満たすための欲求で「欠乏欲求」と呼ばれ、最後の自己実現の欲求は、自己を高めるための「成長欲求」とされる。最も高次の自己実現の欲求まで辿りつけるためには、その下位層の欲求が満たされることが必要だと示されている。

これらの欲求の中において、自己肯定感に特に関連する欲求は、「所属・愛情の欲求」、「承認・自尊の欲求」であると考えられる。つまり、自分を温かい雰囲気を受け入れてくれる学級(所属・愛情の欲求)の中で、友達から認められたいという欲求(承認・自尊の欲求)が満たされたとき、自己

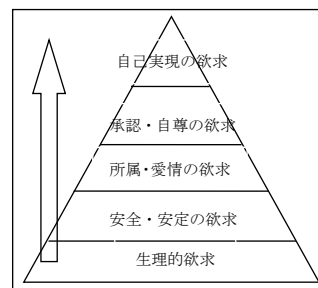
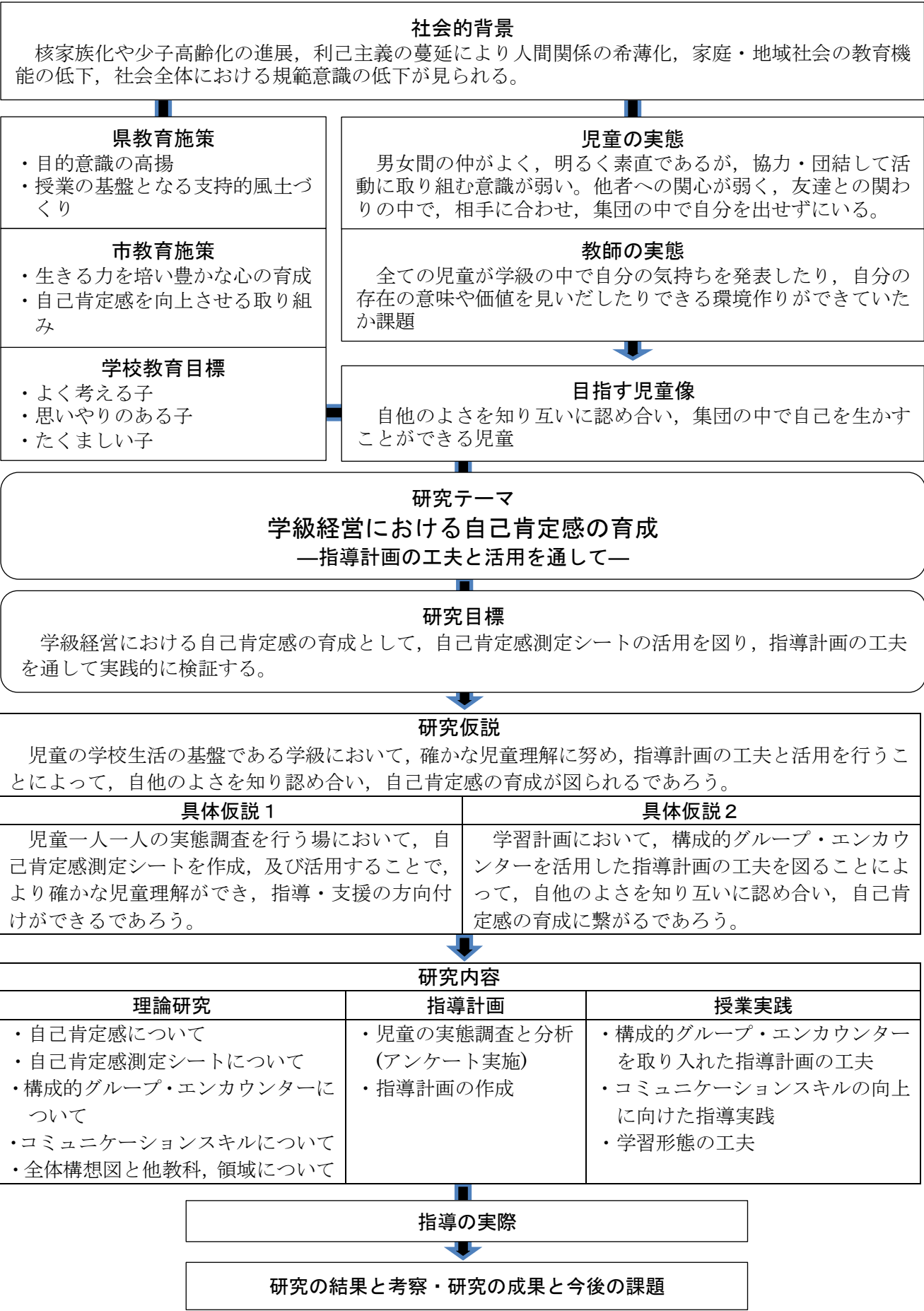


図1 マズローの欲求階層説

V 研究構想図



肯定感が高まると考えるからである。

(2) 自己肯定感の構造

自己肯定感の高まりについては、三段階を経て高まっていくものと諸富祥彦（2000）は述べている（図2）。

① 初步の自己肯定感・・・自分で自分のよい所を見付けて「私にもこんなよい所がある」と自分を励ましたり、自分に言い聞かせたりすることで育つ自己肯定感である。何か不都合なことが起きて自己イメージが崩れると簡単に崩れてしまうので、不安定な自己肯定感と言える。

② 強い自己肯定感・・・人と人との心の繋がりの中で、つまり、本音と本音の交流の中で育つ自己肯定感である。他者から認められるなど、他者との関係の中から自分のよい所を紡いでいくことで築かれていくので、安定した自己肯定感と言える。

③ 深い自己肯定感・・・自分のよい所を肯定するだけに留まらず、自分の弱さや欠点も自分の一部として認め受け入れていく、本当の意味での自己肯定感である。

自分のよさを知り（自己理解）、ありのままの自分を受け入れ自分のことが好きになること（自己受容）、そして、他者から認められたり、受け入れられたりすること（他者理解）により、自己肯定感が育つ。その結果、自分の存在が認められ、受け入れられているという実感が持て、ありのままの自分を肯定的に捉えることができ、より自己肯定感が育つと考える。

そこで本研究においては、自己肯定感を「他者との関わりの中で自分に自信を持ち、ありのままの自分を肯定的にとらえる気持ち」と定義した。また、自己肯定感を構成する要素を①自己受容・自己存在感、②他者との関係（他者理解）、③自己理解・自己主張と3つの観点に分けて定義づけ、（図3）児童の自己肯定感の傾向を把握することにした。

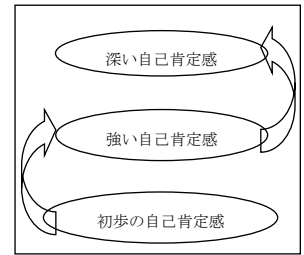


図2 自己肯定感の構造

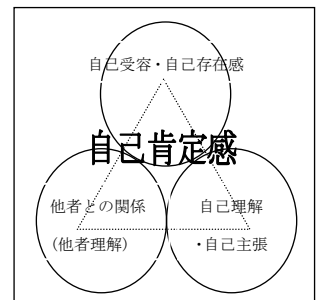


図3 自己肯定感の構成

2 ハートチェック ～自分の心と向き合う～ について

(1) ハートチェック ～自分の心と向き合う～ とは

児童の自己肯定感の傾向を把握するためのチェックシート、即ち、自己肯定感測定シートのことである。児童が、自己をどのように捉えているか、児童自身の意識を自分でチェックする方法で実施することができる。全部で3つの観点、22の質問項目で構成されている。回答は4つの選択肢からなり、1～4点と点数が与えられている（図4）。ここでいう3つの観点とは、①自己受容・自己存在感②他者との関係（他者理解）③自己理解・自己主張である。自己肯定感を構成する要素であり、自己肯定感を支える大きな柱であると考えられる。

(2) 自己肯定感の傾向と分析

① 集計と傾向把握

児童の自己肯定感の傾向把握について、ハートチェックの回答結果を集計する。集計結果は、自己肯定感を構成する3観点ごとに表され、傾向把握ができる。また、集計結果は、個人の結果はもちろん、学級の集団の結果も表示することができる。自己肯定感を育成していく上で、着目する観点が表される。

また、児童からの集計結果は、3観点の大きさを一見して比較できるように三角形で表示した。各観点のデータが一目でわかり、全体の自己肯定感の把握ができる。また、三角形の面積で自己肯定感の高低がわかり、三角形の頂点のバランスで各観点の高低が把握できる（図5）。

② 傾向と分析

集計結果と傾向から、一般的にどのような傾向にあるのか、ま

質問項目	自己受容・自己存在感 (A)	他者との関係 (他者理解) (B)	自己理解・自己主張 (C)
1 あなたは、今の自分に満足していますか。	4	3	2
2 あなたは、みんなの意見を聞き取ることが出来ますか。	4	3	2
3 みんながうらやましていることを、自分の弱さや欠点と受け止めますか。	4	3	2
4 あなたは、自分のことが好きですか。	4	3	2
5 あなたは、みんなの役に立ちたいと思いますか。	4	3	2
6 あなたは、自分ができることがたくさんあると思いますか。	4	3	2
7 あなたは、自分が大きな失敗をしたことがありませんか。	4	3	2
8 あなたは、自分の考えの良さを人に伝えることが出来ますか。	4	3	2
9 あなたは、自分の決めたことを最後までやり遂げることが出来ますか。	4	3	2
10 あなたは、自分を大切に思っていますか。	4	3	2
11 あなたは、自分のことを誇りに思っていますか。	4	3	2
12 あなたは、自分のよいところを人に話して、よく思っていますか。	4	3	2
13 あなたは、夢の叶いはると思いますか。	4	3	2
14 みんながいやなことをやらせられずに、自分の好きなことをして、よく思っていますか。	4	3	2
15 あなたは、誰にも負けない自信がありますか。	4	3	2
16 自分に、よいところがあると思いますか。	4	3	2
17 自分に、よいところを話して、よく思っていますか。	4	3	2
18 あなたは、自分のことを自分で大切に思っていますか。	4	3	2
19 あなたは、みんなの役に立ちたいと思いますか。	4	3	2
20 あなたは、あなたが得意なことを人に話して、よく思っていますか。	4	3	2
21 あなたは、みんながうらやましていることを、自分の弱さや欠点と受け止めますか。	4	3	2
22 あなたは、自分ががんばって、よく思っていますか。	4	3	2

図4 ハートチェック

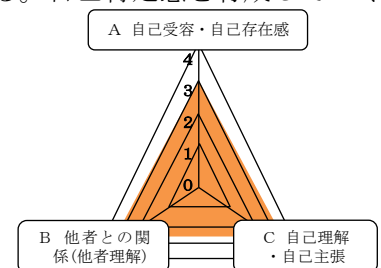


図5 自己肯定感測定図

た、どのような指導の工夫、支援の方法が必要なのか考える必要がある。そこで、自己肯定感をいくつかの型に分類し、各型の傾向と指導・支援を立てることとした（表1）。分析判断の視点として2つある。一つは、全観点のデータの高低を見る方法である。自己肯定感の高低をひと目で捉えることができる。二つ目は、各観点のデータの高低を見る方法である。個々の自己肯定感の傾向と特徴を見ることができ、個々に合った適切な指導・支援の方向性を見ることができる。ここで大事なのが、全観点のデータの高低だけに視点を置くのではなく、個々の傾向を踏まえた視点に着目することである。また、各観点の高低にも視点をあて、適切に指導計画を立て、実施することが大事となる。

表 1 自己肯定感の傾向と指導・支援

自己肯定感の型	傾 向	指導・支援
全観点が高い児童	・自己肯定感が高いと考えられる。 ・自分と同様に他者も大切にすることができる。 ・学校生活にしっかりと適応しており、学習面においても意欲的に取り組む。 ・落ち着きがあり、心身共に安定している。	・自己を客観視できるよう、より確かな自我の形成を促すような体験を取り入れる。
全観点が低い児童	・自己肯定感が低いと考えられる。 ・自己の個性の理解、尊重ができて、自信が持てない。 ・熱中できるものがない状態。 ・学校生活の全般において、消極的であり、自分も他者も否定的に捉える傾向がある。	・日常生活の行動から、状態を把握し、建設的な立場で話を聴き、不安要因を取り除く支援を行う。 ・家庭、教育相談員等の関係機関からの協力を得る。
『自己受容・自己存在感』が高い児童	・今の自分より、もっと良くなりたいという意欲が高い。 ・自己に対する愛憎が強く、他者と衝突しやすい傾向にある。 ・学校生活への適応や個人志向、社会志向は低い。 ・他者からの言葉かけや評価を素直に受け止めることができない傾向がある。	・他者と協力する場面を設定し、自己を客観的に見つめることができるようにする。 ・他者のいいところに目を向けさせ協力して学校生活が送れることができるようにさせる。
『他者との関係（他者理解）』が高い児童	・自分より他者の気持ちを優先し、思いやりの気持が強い。 ・自分に自信がなく、人の言動を意識し、自分の考えを伝えることに戸惑いがある。 ・誰かと一緒にないと不安になりやすく、数人のグループで行動を共にする傾向があり、他者の言動に敏感である。	・自分の行動や判断に自信を持たせ、自分のいいところが感じられる場面や経験を増やすようにする。 ・他者と比較するのではなく、自分の目標の達成を目指すようにさせる。
『自己理解・自己主張』が高い児童	・今の状態に満足せず、みんなをリードしていきたい気持ちが強い。 ・自分のいいところや個性を大事にし、自分のペースを守ることができる。 ・将来や進路への意識が高い。 ・自分の悪いところや自分が決めたいことが他者の助言より強い方法だと考える傾向が強い。 ・自分の情緒だけで判断しがちであり、自己中心的な側面が出やすく、周りとぶつかりやすい傾向がある。	・みんなをリードしたい意欲を尊重し、責任感を持って役割を果たせるよう支援する。 ・友達との関わりの中で、自分の役割を果たしていることを実感できる場面をつくる。 ・同じ事例でも、多くの様々な考え方があることに気付かせ、受け入れられるような場面を設定する。
『自己受容・自己存在感』が低い児童	・他者を理解し、相手と自分の共通点を見つけ、関係性を持ち、協調性を重視する傾向がある。 ・自分の好きなこと、得意なことを見つけて、集中して取り組むことができる。 ・周囲の人への感謝の気持ちを持ち、他者のために協力して物事に取り組む気持ちがある。 ・集団との関わりや協力を避け傾向があり、他者との関係を築くなど対人関係への適応が難しい。	・自分のいいところや個性に気付く場面を多くし、ありのままの自分を受け入れられるようにする。 ・自己への評価が高まるように、具体的な場面を提示し、褒めことで、自己の価値を肯定的に認められるようにする。 ・学校で取り込んだ児童の成果を、保護者に伝え、家庭でも褒める機会を設けてもらう。
『他者との関係（他者理解）』が低い児童	・一人で行動することに自信を持ち、自分の考えをしっかりともっている傾向がある。 ・自分の好きなこと、得意なことを見つけて、集中して取り組むことができる。 ・周囲の人への感謝の気持ちを持ち、他者のために協力して物事に取り組む気持ちがある。 ・集団との関わりや協力を避け傾向があり、他者との関係を築くなど対人関係への適応が難しい。	・他者との関係の中で自分の存在の価値に気付かせ場面を設定し、周りの人の存在の大切さに目を向けさせる。 ・体験的な活動を通して、集団の中でみんなのために活動する楽しさ、喜びを体験させる。
『自己理解・自己主張』が低い児童	・穏やかで他者との関係が良好である。学校生活に適応している。 ・集団活動の場面では、協力的に活動する傾向がある。 ・積極的に自分のことを話すことはなく、自分の判断や行動に不安な様子が見られる。 ・周りの言動や評価を気にしすぎるあまり、自分の考えを表現しなかったり、自分を見失ったりする様子が見られる。	・他者と比較するのではなく、自分なり目標の達成を目指すように支援し、自分の考えを持って行動できるようにさせる。 ・自分で判断し、自分で決めることに自信を持たせ、好きなこと、得意なことに打ち込める場面を設定する。

3 構成的グループ・エンカウンターについて

(1) 構成的グループ・エンカウンターとは

構成的グループ・エンカウンターは、集団学習体験を通して行動の変容と人間的な成長をねらうものである。エンカウンターとは、本音と本音の交流や感情交流ができるような親密な人間関係（体験）のことで、心と心の触れ合いをグループを通して行うのでグループ・エンカウンターという。構成的とは「枠」が存在することであり、内容や方法、時間の枠をリーダーが設定していく。取り決めがあることからその展開がしやすいとされている。

実際の場面では、リーダーがインストラクション（説明）でねらいや実施上の留意点を伝え、ねらいに沿ったエクササイズ（演習）を集団で取り組み、シェアリングと呼ばれる振り返りを行うことで構成されている。この中で集団のメンバーは、自己理解や他者理解を深め、自己の成長や温かい人間関係を築いていく。構成的グループ・エンカウンターでは、エクササイズとシェアリングが大きな柱となっている。

(2) 構成的グループ・エンカウンターと自己肯定感について

自己肯定感を育むとき、親しい他者との触れ合い、積極的な感情交流の機会が必要である。自己肯定感は重要な他者（親、教師、親友）からの評価を摂取して形成されると考えられているからだ。自己肯定感を抱く感覚は、相手や自分がどう思われているかを、言葉や非言語から直接または推測して得ると同時に、相手を意識しながら自分は自分をどう思っているかを考えて、形成されていく。

つまり、肯定的な評価を相手からもらうと自己への評価は積極的なものが形成されやすく、否定的な評価からは、消極的な自己評価が形成されやすい。この自己評価によってつくられた自分像に対し、自己肯定感が生まれる。

全ての他者評価が一律に影響を与えるのではなく、相手がその人にとって親しく重要な存在であればあるほど、評価は価値が高く絶対的なものとなり、自分像に影響を与えていく。また、その影響の強さから、価値のある否定的な評価によって得られた消極的な自分像は、固定化しやすいとされている。

片野智治によれば、「人は自己概念に自分の行動をはめる働きがある」とし「自己概念が行動の基準」になるとしている。そして「自己概念の成分は自己肯定感」だとし「教師は子どもが重要な他者から肯定的な評価をもらい、自己肯定感を高められるように働きかけていけばよい」としている。そのために効果ある方法として構成的グループ・エンカウンターをあげている。

構成的グループ・エンカウターのねらいには自己理解、他者理解、自己受容、自己主張、信頼体験、感受性の促進が組み込まれている。エクササイズの中で行われる対人行動に対して積極的な感情や自己認知が持てるようになっていくことは、自己肯定感が積極的に形成されやすい場となると考えられる。

また、自己肯定感が高い児童は自分の存在を容易に受容し他者を容易に受け入れることが知られている。だから、一人の自己肯定感が高まれば積極的な他者理解も生まれ、それは肯定的な他者評価となって、相手に摂取される。そして新たな自己肯定感を育む。このように相互作用が生まれ、連鎖的に自己肯定感の高まりの輪は広がっていくと考えられる。

これらのことから、構成的グループ・エンカウンターは自己肯定感の育成に大きな役割を果たすと考えられる。

(3) エクササイズとシェアリングの工夫

① エクササイズの工夫

特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」と、学習指導要領に示されている。また、学級活動の内容、共通事項（２）「日常生活や学習への適応及び健康安全」において、７つの事項が示されている。これら目標と内容の中の「望ましい集団活動」「心身の調和のとれた発達と個性の伸長」「集団の一員」「実践的な態度」「望ましい人間関係の形成」「心身ともに健康」の文言は、構成的グループ・エンカウンターのねらいやエクササイズの六つのねらいと同じくするものである。

このように構成的グループ・エンカウンターは集団学習体験であり、そのねらいの共通性から特別活動（学級活動）の場においてなされることが多いが、道徳や教科での活用も実施されている。各教科や総合単元的な取り組みなど、ますます構成的グループ・エンカウンターの活用の役割は大きい。

構成的グループ・エンカウンターの柱であるエクササイズの配列・順序は、児童の実態把握、発達段階の理解が基本である。リレーションづくりからスタートし、続いて、相手への思いやりの増加、自己肯定感の高まり、学級適応という流れが一般的である。内容も動きのあるゲーム性の高いものから内面性に迫っていけるものへと順に高次になる。

本研究は、エクササイズの配列・順序の原則に沿いながら、自己肯定感の育成を図ろうと構成的グループ・エンカウンターを教科、領域の中に取り入れ、指導計画を立てることとした。

② シェアリングの工夫

河村茂雄は、「シェアリングとは、たった今、自分と自分のまわりに起こった出来事について体験したことを、自分の経験として確認していくことである。つまり、自分の体験を『経験』として消化していく作業が、シェアリングといえる。」と述べている。構成的グループ・エンカウンターの二つ目の大きな柱である。エクササイズを振り返ることによって、そこでの気付きや感情を明確化し、ねらいを定着させる働きを持つ。また、一人の気付きや感情を全員で共有することで、他者理解、自己理解ができ、信頼体験を行う。しかし、一時間単位の授業時間内で行うとなると、エクササイズ中心の展開となり、十分なシェアリングの時間が確保できない現状がある。そこで、エクササイズと教科を組み合わせることで共有化を補っていきたい。エクササイズで生じた児童の感情を、教科のもつ特性を生かして表現させる。日々の学校生活の全ての活動においてシェアリングの機会を持つことで、本時で不足したシェアリングの効果を補えると考ええる。また、授業の振り返りの場面では、振り返りシート（にこにこシート）を活用する（図６）。振り返りシートに児童の思いや気持ちを文字として記入していくことで、自分の気持ちがより明確化され意識化できると考える。また、その後の全体での振り返りの手助けにもなるであろう。

振り返りシートの設問項目は、エクササイズのねらいについての振り返りや自分自身と他者に対する視点を意図的に作成する。エクササイズを達成していく中でねらいから外れることを防ぎ、「楽しかった」「お

にこにこシート 4年 組 番
 ～ にこにこグループ・エンカウンター ～ 名前 _____

♡ 今日の勉強を振り返ろう。♡

○今日のエクササイズをして、友達のことを感じたこと・思ったこと・気付いたことを書いてください。

○今日のエクササイズをして、自分のことを感じたこと・思ったこと・気付いたことを書いてください。

チェック! (◎はい! ○どちらでもない △いいえ)♡

★今日の勉強は、楽しかったですか。 ()

★『エクササイズのきまり』がわかりましたか。 ()

★友達と仲良くジャンケンできましたか。 ()

★友達にやさしい言葉がけ!「ありがとう。楽しかったでしょう。」が言えましたか。 ()

★今日の女子力さん☆は、 () さん ()

どうしてかな? 理由をどうぞ!

図6 振り返りシート

もしよかった」だけの感想からより内面に向けた言葉を求めることが必要だからである。

また、エクササイズのねらいを達成する上で必要な達成目標や留意点、技術的な事項がある場合は、チェック項目として取り上げておくことで、エクササイズの達成への手立てとすることが効果的だと考える。チェックの方法も自己評価だけでなく相互評価も組み合わせる場合もあり、他者との関わりを持たせ、他者理解へのきっかけとなることを意識的に記載した。

4 コミュニケーションスキルについて

(1) コミュニケーションスキルとは

「人間関係に関する知識と具体的な技術やコツ」（「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」小林正幸・相川充編著）を総称してソーシャルスキルと言う。そのソーシャルスキルの中でも最も重要なのは、コミュニケーションスキルであると大坊郁夫（2006）は述べている。つまり、コミュニケーションスキルとは、数あるソーシャルスキルの一領域に当たる（図7）。具体的には、あいさつをする、自己紹介をする、質問をするなどの言語表現や視線、表情、動作などの非言語表現の技術などがある。本研究では、コミュニケーションスキルを「会話、話し合い、自己表現に関するスキル」と捉え、聴く、話すスキルと共感的なスキルを実施する。また、構成的グループ・エンカウンターと連動した活動計画を作成し、コミュニケーションスキルをより習得できるように1単位時間の手順を踏まえて指導を行う（表2）。

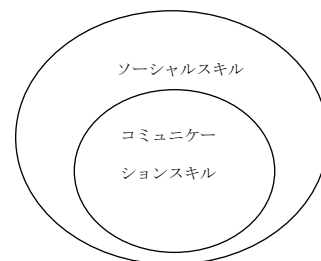


図7 位置関係

表2 コミュニケーションスキル展開の手順（1単位時間）

展 開	内 容
1 インストラクション	獲得を目標とするスキルを決め、訓練する必要性を気付かせながら言葉で教える。
2 モデリング	よいモデルと悪いモデルを見せて、スキルの意味や具体的な使い方、相手に与える印象などを理解させる。よいモデルの特徴をまとめて、リハーサルに生かせるようにする。
3 リハーサル	インストラクションやモデリングで示した適切なスキルを、実際の行動で何回も繰り返し練習させる。児童にとって具体的な場面を想定し、ロールプレイを多く用いるようにする。スキルを試したときに楽しさや心地よさを味わわせる。そのことで、自主的に行動に表せる。
4 フィードバック	リハーサルでの児童の行動に対して、褒めたり、共感して、その行動をとる意欲を高める。また、不適切な行動の場合は修正を加える。その際は、否定的な言い方はせず、肯定的な言い方をする。
5 定着化	教えたスキルが日常場面で実践されるように促す。言語的教示を与え、一定の目標を設定した課題を与えて定着化を目指す。

(2) 授業展開の手順

「インストラクション」「モデリング」「リハーサル」「フィードバック」「定着化」という流れを示すと次のようになる（図8）。インストラクションで、児童に人と付き合うことの大切さを気付かせ、課題に取り組む気持ちにさせる。そして、モデルを示し（モデリング）、繰り返して練習（リハーサル）させる。リハーサルの程度を見てフィードバックを与える。場合によっては、もう一度目標とするスキルを強調し、確認するためにモデルを見せて、リハーサルとフィードバックを繰り返す。そのうえで、日常生活で生かすように勧め、スキルの定着が図られると考える。

(3) 上手な聴き方

人の話を聴くことは、受動的な行為のようだが、実際は能動的な行為である。上手に話を聴くスキルは、人間関係の形成にとって、最も重要なスキルである。児童には相手の話に注意深く耳を傾けることがなぜ必要なのかを伝える。相手の話を聴けば自分が何をすればいいのかがわかる、相手の気持ちや考えが理解できる、相手に興味・関心をもっていることを伝えることができる、などに気付くと考えられる。また、何気なく行っている「聴く」という行為を意志的に行う具体的なスキルを伝える。例えば、集中して相手の話を聴くスキル指導や聴いていることを相手に伝えるスキル指導などである。モデリングとして、悪い聴き方を示し、その時の気持ちはどのようなものであるかを知らせ、それと対比して、よい聴き方とはどのようなものなのか具体的に示すことで効果的な指導となると考える。

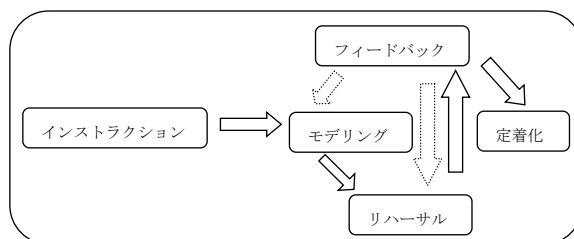


図8 授業展開の手順

(4) あたたかい言葉かけ

このスキルは、相手の気持ちを肯定的にするスキルの一つであり、他者との関係を深める重要なスキルである。児童には、自分の発する言葉が、相手にどのような影響を与えるかを認識させ、あ

たたかい言葉かけと冷たい言葉かけを区別できるように指導する。「褒める」「励ます」「心配する」「感謝する」などがあたたかい言葉かけに含まれることを示し、状況に応じて使うことができるようにリハーサルをする。

このスキルの目標は、相手に対する自分の気持ちを言葉で伝えることであり、「感じていない」「思っていない」ことを話す練習ではない。自分の考えに沿わないことは話さないことをしっかりと押さえ、指導することが重要であると考えます。

5 全体構想図と他教科、領域との関連について

本研究では、自己肯定感の育成は、学級経営が大きな役割を占めていると考える。同様に、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間並びに特別活動の場においても同じことが言える。

つまり、学校教育の全場面において、自己肯定感が育まれる環境を作ることが必要だと考える。そこで、各教科や領域等の学習内容から自己肯定感の育成に即した内容を取り上げ、自己肯定感を構成する要素である3観点を補う視点を踏まえ、全体構想図（図9）と3観点と他教科との関連表（表3）の作成を行った。

また、自己肯定感の育成は、学校教育だけでは成り立たない。家庭、地域との連携、協力があって初めて成り立つものである。全体計画、指導計画に盛り込むことでより一層の自己肯定感の育成につながると考える。本市においても学校教育すべての場面において、自己肯定感の向上に向けた取り組みを行っており、自己肯定感の構成要素を「居場所（自己存在感）」「貢献（自己有用感）」「達成感（自己有能感）」としている。例えば、授業においても、学習規律が徹底され、支持的風土の形成の中、全員参加の授業であるか、話し合いや学び合いが行われ、深まりのある授業であるか、児童が問題解決の方法に気が付き、わかる・できる喜びを感じることができるとする授業であるか、これらの視点で捉えていくこととしている。



図9 全体構想図

表3 3観点と他教科との関連表

観点	教科・領域 支援内容	各教科	道徳	特別活動(学級活動)	家庭と地域の連携、 学校行事
自己受容・自己存在感	努力した成果や自分の長所を実感し、自己を積極的に認めることができるようにする。	国語：「三つのおどろい」 理科：「動物のからだのつくりと運動」 音楽：「日本の音楽に親しもう」 図画工作：「絵と音楽で表そう」 体育：「心についたことを」 体育：「楽観運動」	「口で歩く」 「気持ち」 「仲間をさがせ！お願い協力し」 「人のふり見て、わがふり直せ」	「いいところさがし」 「もうすぐ5年生」	【主な行事】 (家庭・地域) ・学級懇談会 ・家庭訪問 ・授業参観 ・親子一斉下校
他者との関係(他者理解)	周囲の人との関わり合いを通して、自分の役割を果たしていることや周囲の人の大切さを感じることができるようにする。	国語：「よりよい学級会をしよう／話す言葉は同じでも」 「大きな力を出す／働いて、考えて、また働く」 「一つの花」「ごんぎつね」 社会：「安全なくらしとまちづくり」 「健康なくらしとまちづくり」 理科：「あたたくくると」「暑くくると」 「すずしくくると」「寒くくると」 音楽：「音の重なりを感じ取ろう」 「生き物の一年をふり返って」 体育：「休つき運動」「ゲーム」	「みんなのルール」 「日本のお父さん、お母さん」 「ぼくたちの手で環境を守りたい」 「つばさを下さい」 「教室はまちがうところだ」 「こう言ってほしいな」 「ひろつたりんご」 「一枚の写真」 「はたのる」	「一学期の役員と係をきめよう」 「楽しい夕食」 「当番活動を充実させよう」 「学級の目標を決めよう」 「もうすぐ運動会」 「働く人々の感謝」 「もうすぐ学芸会」 「二学期の役員と係を決めよう」	個人面談 ・地域懇談会 ・親子PTA作業 ・学年PTA行事 ・夏祭り (学校) ・身体測定 ・一年生を迎える会 ・春の遠足 ・創立記念集会 ・小中陸上競技大会 ・校内運動会
自己理解・自己主張	自分の長所も短所も受け止め、認め、今後の行動に繋がるようにする。	国語：「仕事リレー」を作ろう 図画工作：「すてきなペーパーショップ」 「物語の世界」 音楽：「いろいろな世を感じ取ろう」 保健体育：「育ちゆくからだわたし」	「こん虫カマラン」 「わたしのレシピ」 「おじいさん、どうぞ」 「絵をかくのが大好き」 「勝手に決まらないうい！」	「4年生になって」 「二学期を迎えて」 「男女仲良く」 「新年を祝えて」	運動会 ・校内音楽会 ・社会見学 ・学芸会 ・六年生を送る会

Ⅶ 研究実践（公開検証授業指導案）

特別活動指導案（学級活動）

平成24年12月11日（火）2校時
沖縄市立コザ小学校4年1組
男子12名 女子8名 計20名
授業者 仲原 英志

1 題材名 「言葉で伝えよう ～みんなのいいところ～」

2 ねらい

自他のよさを知り互いに認め合い、集団の中で自己を生かすことができる。

3 題材について

(1) 題材観

小学校学習指導要領第6章特別活動はその目標を「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」としている。目標に示されている「個性の伸長」の部分には、様々な集団活動を通して、自他のよさや可能性に気が付き、理解し、互いに認め合い、よりよく伸ばし合うとともに、自分への自信を持ち、積極的に集団活動に生かしていくことと示されている。他者受容（＝他者理解・他者の個性発見）

のみならず自己受容（＝自己理解・自己の個性発見）は教育活動全体を通した集団活動の中において行われる必要がある。また、学級活動の内容、共通事項（２）「日常の生活や学習への適応及び健康安全」における、ウ「望ましい人間関係の形成」の事項に本題材は値する。

本題材は、道徳内容項目１－（５）「自分の特徴に気づき、よい所を伸ばす。」を中心とした、２－（３）「友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。」とも深い関わり合いを持つ。個性の伸長は、極めて重視されなければならない道徳的価値である。それは自分のよさを生かすことであり、自分らしさを発揮しながら調和の取れた自己を形成していくことである。中学年においては、自分の特徴に徐々に気付くことから長所を知り、それを積極的に伸ばそうとする態度を育てる必要があるとされている。ところが自分の長所を知ることがなかなか容易ではない。自分の長所を捉えようとすると、これまでの成功・失敗等の経験を基にした狭い視野からの結果論的な導きによるところが多く、短所には気づきやすいが、自分のよい所に自信を持って発言できる子は少ない。自己への肯定感（＝自己受容）が弱いと思われる。

そこで、お互いを褒めたり褒められたりする活動の場を設定することによって、自分のよさに気付かせたい。友達が見つけた自分のよさを知り受け入れることで、自己肯定感を高め、素直に広い視野から自分の特徴や長所に目を向けることができるはずである。

（２）児童観

① 観察から

学級経営方針に「やさしい心を持ち、お互いに助け合い、協力し、認め合う学級」を掲げて取り組んでいる。これまでお互いの関わり合いを増やすような活動を意図的に進めてきたため、新しいグループを結成しても活動自体は割合スムーズに行われる。また、学級全体の雰囲気として、明るく素直な児童が多い。男女間の仲もよく、共に活動する様子が見られる。一方、学級の課題としては、活動における交流の深まりが感じられないことである。活動を一緒にするためだけの小集団となり友達への積極的な関心は生まれず、その後の豊かな人間関係への広がりにはなっていない。また、学級集団として、一人一人が協力・団結して取り組もうという意識や周りの友達に関心を持って、深く関わろうとする意識の弱さが挙げられる。最近においては、基本的な生活習慣や学習規律の定着が不十分なことが挙げられる。特に学習姿勢や聞く、話す姿勢については４月から継続して指導を行っている。

② 「ハートチェック ～自分の心と向き合う～」から

「ハートチェック ～自分の心と向き合う～」は、児童の自己肯定感の傾向を把握するためのチェックシートである。全部で３つの観点〔自己受容・自己存在感、他者との関係（他者理解）、自己理解・自己主張〕から成り、２２の質問項目で構成している。回答は４つの選択肢からなり、１～４点と点数を与えた。教師の日常観察による児童理解の見落としを補い、児童個々の状態及び、学級の実態を理解するための客観的で多面的な実態を把握できるシートである。

その結果から本学級は、全体的に各観点の値が高く、自己肯定感、比較的に高い傾向にあると考えられる。傾向としては、自分も相手も大切にすることができる。また、日常生活において落ち着いていて、心身共に安定しており、物事に意欲的に取り組むことができると考えられる。

次に、男女の３観点の平均を比較した。「自己受容・自己存在感」と「自己理解・自己主張」の２観点において、男子のほうが高い値を示し、「他者との関係（他者理解）」においては、女子のほうが高い値を示した。特に、自分を理解してくれている人への気づきや他者への感謝する気持ちにおいては、高い値を表していた。

次に、３観点の中で、最も落ち込んでいるのは、「自己理解・自己主張」の観点である。これは、男女とも同じように最も落ち込んでおり、値が２点台の児童が最も多かった。特に、女子においては、どの観点よりも最も平均の落ち込みが見られた。これは、学級の最優先に対処すべき課題と感じる。

さらに、気になる児童として、Ｋ君の存在に着目した。Ｋ君は、学級の中で唯一、３観点すべて２点台の児童である。「自己理解・自己主張」に関しては、学級において最も低い値を表した。

（３）指導観

今回の授業における指導方法の工夫として、エンカウターの活用を図ることとする。エンカウターとは、本音と本音の交流や感情交流ができるような親密な人間関係（体験）のことで、心と

心の触れ合いをグループを通して行うのでグループ・エンカウンターという。構成的グループ・エンカウンターとは集中的グループ経験の一つで、集団学習体験を通して、行動の変容と人間的な成長をねらうものである。

集団学習体験でありそのねらいの共通性から特別活動（学級活動）の場においてなされることが多い。今回のエクササイズは、自己理解、自己受容を中心に行われ、友達が見つけた自分のよい所を知り、受容される喜びを味わうことで、自己肯定感が育成されるものと期待できる。学級指導の中で行われるが、特別活動との密接な関係から、その高まった自己肯定感は、自分のよい所を積極的に伸ばしていこうとする心情や実践意欲、態度を確かなものとするだろう。

4 本研究との関わり

本研究のテーマは「学級経営における自己肯定感の育成」であり、今回の検証授業はその具体仮説(2)「学習計画において、構成的グループ・エンカウンターを活用した指導計画の工夫を図ることによって、自他のよさを知り互いに認め合い、自己肯定感の育成に繋がるであろう。」の検証にあたる。「学級経営における自己肯定感」とは、学級が今まで以上に安心できる場、一人一人の児童にとって存在感のある場、自己実現の場になることで、児童は生き生きと過ごすことができると考える。その中で、自分のよさを知り(自己理解)、ありのままの自分を受け入れ自分のことが好きになること(自己受容)、そして、他者から認められたり、受け入れられたりすること(他者理解)により、自己肯定感が育つ。その結果、自分の存在が認められ、受け入れられているという実感が持て、ありのままの自分を肯定的に捉えることができ、より自己肯定感が育つと考える。

沖縄市が取り組んでいる「自己肯定感の向上」についても下記の点で本研究と関わりがある。

- (1) 友達や自分のよい所を認め合い、自分の存在が認められていると感じる「居場所（存在感）」。
- (2) ペアでの話し合いやグループ活動において考えを交換し合い、互いに学び合う「貢献（有用感）」。
- (3) 自分や友達の考え、感じたことを理解し、主体的に学校生活を過ごす「達成感（有能感）」。

本題材を通して、お互いのよい所に気付き理解し認め合うことで、自己肯定感を育成していこうと考える。

5 評価規準

【学級活動（2）「日常の生活や学習への適応及び健康安全」第3学年及び第4学年】

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
自己の生活上の問題に関心を持ち、意欲的に日常の生活や学習に取り組もうとしている。	楽しい学級生活をつくるために、日常の生活や学習の課題について話し合い、自分に合ったよりよい解決方法などについて考え、判断し実践している。	楽しい学級生活をつくることの大切さ、そのためのよりよい生活や学習の仕方などについて理解している。

6 指導計画

時	学習活動・内容・教科・領域	ねらい・指導上の留意点	評価規準と評価方法 ○評価規準・()は評価方法
	・ハートチェックの実施 児童の実態調査	・自分自身を振り返り、見つめ直す機会とする。	(ハートチェックへの記述・分析)
1	11/20(火)2校時 【学級活動】 「エクササイズについて」 ・エクササイズの約束について学ぶ。 「なかよしジャンケン」 ・人間関係がスムーズにできるようにする。 ① ペアで椅子を向い合わせる。 ② 右手で握手をし、握ったままジャンケンをする。 ③ 勝った人は、相手の右手の甲を叩く。1分間続ける。 ④ 1分後、お互いに右手の甲をさすりながら、「ありがとう。痛かったです。ごめんね」といたわり合う。 ⑤ 感じたことをふり返しシートに書き、発表する。	・ルール・マナーの確認をし、理解することで、自己開示しやすい雰囲気をつくる。 ・自己防衛機制を解除させ人間関係がスムーズにできるようにする。 【信頼体験・自己開示】 ① 児童の数が奇数の場合は、教師が参加する。 ② 絶対に離さないように指示する。 ③ 負け続けている児童への声掛けを行う。 ④ しっかりと目を見て、はっきりと話すことをおさえる。 ⑤ お互いに感じたことを伝えさせるために時間を確保する。	【知識・理解】 ○エクササイズのきまりについて理解できる。 (ふり返しシートへの記述・分析) 【知識・理解】 ○活動を通して、お互いの気持ちを理解することができる。 (ふり返しシートへの記述・分析) (発言の確認)
2	11/21(水)5校時 【体育】 「カムオン・電車」 ・協同作業を通して、全体と個のかかわりを知る。	・ルールを守りながら友達と協力する楽しさを味わう。集団が個人を支え、個人が他の人との関係の中で存在することを理解する。 【感受性・他者理解】	【関心・意欲・態度】 ○グループで協力しながら楽しく遊ぶことで、交友関係を広めている。

	① 各チームでジャンケンが一番強い王様を決める。 ② 王様以外の方は、他チームの王様とジャンケンで対戦する。 ③ 勝った人は次の人にタッチ。負けた人は「カムオン」とチームを呼び寄せ、勝つまで繰り返す。	① チャンピオンを決めにくいチームには、実際にやってみるとか、普段の様子を思い出させるなど声かけをしていく。 ② 王様として出ている児童を拍手で称える。 ③ 大きな声で「カムオン」と言えない児童には、チームでどうやってフォローできるか考えさせ、対策を決める。	(行動の観察・発言の確認) 【知識・理解】 ○ルールを守ることの大切さを理解する。(ふり返しシートへの記述・分析)
3	11/28 (水) 2校時 【国語】 「うれしい聴き方」 ・うれしい聴き方を身に付ける。 ① 話をして返事が返ってくるだけでも元気になることを知る。 ② うれしい聴き方と悲しい聴き方を実演する。 ③ うれしい聴き方を知る。 ④ ペアになって、実際に体験する。	・うれしい聴き方を明確にして体験することで、あらためて聴き方を身に付ける。 【コミュニケーションスキル・自己受容】 ① 返事以外のうれしい聴き方は何か問題を持たせる。 ② 2つの聴き方の違いについて指摘させる。 ③ 全体で確認する。 ④ 児童が話しやすいように話の内容を事前に準備する。	【知識・理解】 ○うれしい聴き方とはどのようなものか理解することができる。(ペア活動での発言)(ふり返しシートへの記述・分析)
4	11/29 (木) 6校時 【道徳】 「無人島 SOS」 ・みんなのいろいろな考えを知り、学級が個々の多様性を包み込んで成り立っていることを理解する。 ① 生き延びるために必要な物を次の中から8つ選び、自分なりに順番を決める。 ② ペアになって話し合い、理由も添えて意見をまとめる。 ③ 答えは一つでないことを確認して、全体で質問し合う。 ④ 自分の意見を再検討する。	・自分の考えを説得的に友達に伝える。多様な考えのあることを知り、お互いを認め合う人間関係をつくる。 【自己理解・他者理解】 ① 各自で記入させ、自分の意見で話し合いに参加させる。 ② メモに基づいてお互いの意見を十分に話し合わせる。 ③ 自分たちの意見に自信をもてるように支援する。 ④ 友達の意見も大切な意見として尊重し合えるような雰囲気づくりをする。	【思考・判断・実践】 ○自分の考えを知り、相手に伝えるための表現を考えることができる。 ○多様な考え方に気付く、お互いを認め合える人間関係を築くことができる。(ふり返しシートへの記述・分析)(発言の確認)
5	11/30 (金) 3校時 【道徳】 「すごろくトーキング Part1」～うれしい話し方～ ・グループのメンバーの考えを知り、自分の考えと比べ、理解し合う。 ① エクササイズのルール・めあてを確認する。 ② 「うれしい聴き方・うれしい話し方」の読み合わせをする。 ③ グループのリーダーを決め、スタートする。 ④ お互いの考えを聴いて、話して感じたことをまとめる。	・お互いに認め合い、自分との共通点を発見し、他者を理解し尊重する態度を養う。 【他者理解・自己受容・コミュニケーションスキル】 ① 自分の考えを素直に話し、相手の話をしっかり聞いてあげることが楽しく行うポイントだと確認する。 ② 掲示資料を読み合わせ、約束の徹底を図る。 ③ おしゃべりがねらいであるため、逸脱が見られない限り、温かく見守る。しかし、全員が参加できるように誘導していく。 ④ 友達のことや自分のことで気付いたことを話し合わせる。	【関心・意欲・態度】 ○自分の考えや経験を素直に語り合ったり聴き合ったりすることでお互いに信頼し合う態度を養うことができる。(エクササイズ中での発言)(発表)(ふり返しシートへの記述・分析)
6	12/5 (水) 3校時 【学級活動】 「ほめほめ大会」 ・自分を知り肯定的に受けとめるきっかけとする。 ① 1グループ4人になり、他の3人について褒めることを2つ見つけて書く。 ② 書き終わったら、お互いに交換する。 ③ 友達が書いてくれた文章を見て、発表する。 ④ お互いに認め合い、ふり返しシートに記入する。	・友達を肯定的に見ることで、思いやりの心を育てる。学級みんながお互いを認め合う体験を通して、自己肯定感を培う。【自己理解・自己受容】 ① きちんと友達を見て、褒めるようにさせ、お世辞は言わないことを確認する。 ② 時間内で友達の褒める言葉を書かせる。 ③ 発表することを拒む児童には、書いた児童に代読させる。 ④ 自分の言葉で今の自分の気持ちを表現させる。	【関心・意欲・態度】 ○学級の友達みんなを肯定的に見ることができ、思いやりの心を持って接することができる。(行動の観察・発言の確認)(ふり返しシートへの記述・分析)
7	12/6 (木) 4校時 【国語】 「あたたかい言葉シャワー」 ・あたたかい言葉かけは人間関係をあたたかくすることを知る。 ① 学習シートで、あたたかい言葉と冷たい言葉を分け、あたたかい言葉とは何かを知る。 ② ペアになり、あたたかい言葉を考え、言い合う。 ③ グループになり、一人ずつあたたかい言葉をかける。 ④ どんな気持ちか話し合う。	・あたたかい言葉とは何かを知り、あたたかい言葉をかけられる体験を通してそのよさを味わう。 【コミュニケーションスキル・自己理解】 ① 実態に応じて、例を加えあたたかい言葉の内容を詳しく説明する。 ② 交代して両方の役をやらせる。 ③ あたたかい言葉かけができていないグループを全員に紹介し、いろんな感情語でできていることを知らせる。 ④ 板書して、あたたかい言葉と一緒にまとめる。	【知識・理解】 ○あたたかい言葉とはどのようなものか理解することができる。(ペア・グループ活動での発言)(ふり返しシートへの記述・分析)
8	12/10 (月) 6校時 【学級活動】 「すごろくトーキング Part2」	・お互いに認め合い、自分との共通点を発見し、他者を理解し尊重する態度を養う。	【関心・意欲・態度】 ○自分の考えや経験を

	・グループのメンバーの考えを知り、自分の考えと比べ、理解し合う。 ① エクササイズのルール・めあてを確認する。 ② 「うれしい聴き方・うれしい話し方」の読み合わせをする。 ③ グループのリーダーを決め、スタートする。 ④ お互いの考えを聴いて、話して感じたことをまとめる。	【他者理解・自己受容】 ① 自分の考えを素直に話し、相手の話をしっかりと聞いてあげることが楽しく行うポイントだと確認する。 ② 掲示資料を読み合わせ、約束の徹底を図る。 ③ おしゃべりがねらいであるため、逸脱が見られない限り、温かく見守る。しかし、全員が参加できるように誘導していく。 ④ 友達のことや自分のことで気付いたことを話し合わせる。	素直に語り合ったり聴き合ったりすることでお互いに信頼し合う態度を養うことができる。(エクササイズ中での発言) (発表) (ふり返しシートへの記述・分析)
9 本 時	12/11(火) 2校時 【学級活動】 「言葉で伝えよう～みんなのいいところ～」 ・お互いのよい所を認め合う体験をする。 ① 1グループ4人を作る。 ② 友達のよい所を記入する。 ③ 友達を書いてくれた自分のよい所を伝え合う。 ④ 感じたことを発表し合う。	・友達が見つけた自分のよさを知り、受け入れられることを喜び、味わう。 【自己理解・自己主張】【自己受容・自己存在感】 ① 広告紙を使用し、組み合わせることで、グループが完成することを知らせる。 ② あらかじめ一人一人のよさを用意しておく、見つからない時にヒントを与える。 ③ きちんと友達を見て、読んであげるように指示する。 ④ よい所を見付けてもらうのは気持ちがいい。見付けてあげた友達が喜ぶと自分もうれしいことを感じさせる。	【関心・意欲・態度】 ○自分のよい所を知り、受け入れられる喜びを味わうことができる。(行動の観察・発言の確認) (ふり返しシートへの記述・分析)
10	12/12(水) 6校時 【道徳】 「自分への手紙」 ・自己の成長に気付き、肯定的に評価することで学校生活への意欲を高める。 ① 2学期前半にできるようになったことを書き出す。 ② 自分にあげたい賞を選ぶ。 ③ がんばった自分へ手紙を書く。 ④ グループで読み合う。	・自分ができるようになったこと、努力していることに気付き、自分で自分を褒めることの楽しさを味わう。【自己受容】 ① 自分のめあてや行事に目を向けさせる。 ② 同じことでがんばった友達と相談したり、声をかけてあげる。 ③ 早くできた児童の手紙を読んであげてヒントにさせる。 ④ 早くできた児童は、グループ以外の児童との交流をさせる。	【思考・判断・実践】 ○自分ができるようになったこと、努力していることに気付くことができる。 ○自分自身で褒めることの楽しさを味わう。(ふり返しシートへの記述・分析)
	・ハートチェックの実施 児童の実態調査	・自分自身を振り返り、エクササイズ前の自分の変容や成長に気付き、今後の活動につなげる。	(ハートチェックへの記述・分析)

7 本時の指導

(1) 本時の目標

友達が見つけた自分のよい所を知り、みんなに受け入れられることの喜びを味わう。

(2) 授業仮説

友達のよい所を伝え合う場において、他のグループの友達から話し合ってみつけてもらった自分のよい所を伝えてもらうことにより、みんなに受け入れられることの喜びを感じることができるであろう。

(3) 評価規準

観点	評価規準	「十分満足できる」状況 (A)	「おおむね満足できる」状況 (B)	「努力を要する」状況 (C) ○児童への手立て
関心・意欲・態度	自分にはどんなよい所があるのか関心を持って気付き、自分のよい所がみんなに受け入れられている喜びを感じている。	自分にはどんなよい所があるのか関心が高く、自分のよい所がみんなに受け入れられている喜びを前向きに受け止め、友達のよい所を認めてあげることができる。	自分にはどんなよい所があるのか気付き、自分のよい所がみんなに受け入れられている喜びを感じることができる。	自分にはどんなよい所があるのか関心がなく、自分のよい所がみんなに受け入れられている喜びを感じることができない。 ○日常の友人関係から興味・関心を引く出来事は何か想起させ、そこから感じingことを引き出させる。その中からよい所を拾い上げ伝える。また、友達から伝えてもらったよい所も自分のよい所だと再認識させ、みんなよい所があることを伝える。

(4) 本時の展開 (9 / 10 時間)

過程	学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点・ 【評価の観点】(評価方法) [自己肯定感向上の3観点]
導入	1 なかま探し ・4等分された広告紙を組み合わせて仲間を探す。 2 グループで席に座る。 ・今日のグループの仲間を確認し握手をして活動の場に座る。 3 めあてを確認する。	・誰とグループになるかな。ワクワク。 ・グループの人が見つかった。よかった。 ・今日もヨロシク。	[I②興味関心・意欲向上] ○仲間を探せない児童のグループへ声かけをする。 ○活動する場(机)を明記する。 [I①学習規律・ルールの徹底]
展開	4 エクササイズの説明を聴く。 5 エクササイズをする。 「いいところをさがそう」 ① カードに自分の名前を記入する。 ② カードを集め、隣のグループと交換する。 ③ 他のグループの仲間一人一人のよい所を話し合って記入する。(一人当たり2分程度) ④ 書き上がったカードを元のグループに返してあげる。 ⑤ 自分のカードを受け取る。 「言葉で伝えよう」 ① グループでカードを交換し合う。 ② お互いのよい所を伝え合う。 ③ 伝え終わったら、にこにこシート(ふり返しシート)に、今の気持ちを記入する。 ④ グループで代表を決め、自分のよい所を伝える。(発表)	・友達のいいところをたくさん見つけるぞ。 ・〇〇さんはこんな所がよい所だと思うよ。 ・〇〇さんのよい所はどこだろう。 ・言葉で伝えるって恥ずかしいな。 ・自分のことを言われるとなんだか照れくさいな。 ・こんなふうに見ていたんだ。 ・自分は、こんないいところもあったんだ。 ・自分のいいところを言葉で言われてうれしい。	○友達のよい所を素直に見付けていくことを押さえる。 [K③話し合い・学び合いの組織] ○前時で習った「あたたかい言葉」を想起させる。 ○友達が傷つくような言葉にならないように注意させる。 ○よい所を探せずに困っている児童へ助言する。 ○「うれしい聴き方・話し方」を想起させる。 ○相手が読み終わるまでは声を出さずに静かに聴くことを押さえる。 ○伝える人もゆっくりと聴きやすい声の大きさと話すことを確認する。 【関心・意欲・態度】 ○自分のよい所に気付き、みんなに受け入れられることの喜びを感じることができる。 (ふり返しシートへの記述・発表)
まとめ	6 ふり返しシートを発表する。 「にこにこシート」の記入を基に発表する。 7 本時のまとめをする。	・いいところをいっぱい言ったら、いい気持ちになった。 ・もっとみんなと話して、よい所を見付けたいな。	[I⑥支持的風土(認め合い)] ○みんなよい所があることを確認する。 ○よい所を見つけてもらうのは嬉しいことであり、見つけてあげた友達が喜んでいて自分まで嬉しくなることをおさえる。

8 公開検証授業の様子

① 仲間さがし

同じ種類の広告紙を持っている友達を探します。今日一緒に活動する仲間(グループ)が決定です。



写真1



写真2

「こことあいそだよ!」
 「いっしょのグループだね」
 「がんばろうね!」



写真3

② 友達のいいところをさがそう(グループ活動)

「〇〇さんのいいところはどこ？」
「掃除時間に・・・」



写真 4

隣のグループの友達のいいところを協力して探します。『あたたかい言葉』を想起しながら、ワークシートに記入！「〇〇さんのいいところ たくさん見つけるぞ。」



写真 5

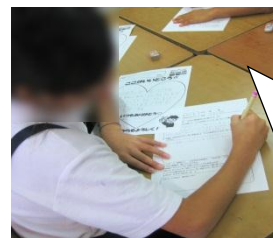


写真 6

「あつ、思い出した！〇〇さんのいいところは・・・」もつとあるぞ！

③ 言葉で伝えよう(グループ活動)

「〇〇さんのいいところは、～です。」「私もそう思う。同じ気持ちだね。拍手！」



写真 7

隣のグループが書いてくれたいいところをグループの仲間に伝えてもらいます。どんな気持ちかな？『うれしい聴き方・話し方』を想起しながら伝え合おう。



写真 8



写真 9



写真 10

「〇〇さんは、漢字の練習を・・・」
「自分のいいところを友達に伝えてもらってなんだか照れるな。」

④ 自分のいいところをみんなに伝えよう

友達に書いてもらった自分のいいところを学級のみんなに発表します。
自分のいいところを見つけてもらった時の気持ちは？グループの友達に伝えてもらった時の気持ちは？ どうだったのかな。



写真 11

「〇〇さんは、僕が気付かなかった僕のいいところを書いてくれました。少し照れたけど、うれしかったです。」



写真 12



写真 13

「ぼくのいいところは、「やさしいところ」と書かれていて、とてもうれしかったです。これからも・・・」



写真 14

⑤ふりかえり

※児童の「にこにこシート」への記入

② 友達に『自分のいいところ』を言われて、どんな気持ちでしたか。思ったことを書いてください。

自分で読むより人に読んでもらったほうがうれしいんだなとわかりました。

自分でも気づかない所を見つけて書いてもらって、いたのてうれしかったです。

友達に『自分のいいところ』を言われて、思ったことはうれしか、もし、自分には、分らなかったのがあったので、みんないいところがあるんだなあと思いました。

図 10

♡ 今日の勉強をふり返ろう。♡

① 友達の『いいところ』を話して、どんな気持ちでしたか。思ったことを書いてください。

みんなは、みなみさんのごと、こうゆうふうに思っていたんだなと思いました。友達の『いいところ』を話すと、みなみさんは、こんなに三線が上手な人なんだよと、いいところをわかってきました。

② 友達に『自分のいいところ』を言われて、どんな気持ちでしたか。思ったことを書いてください。

自分、友達に、こんなふうに思ってもらって、いたんだなと思いました。
私は、『自分のいいところ』を読んでもらってうれしい気持ちになりました。それに、『自分のいいところ』が、もっとよくなっていきます。

チェック! (◎はい! ○どちらでもない △いいえ)♡

- ★今日の勉強は、楽しかったですか。 (◎)
- ★友達の『いいところ』を見つけてことができましたか。 (◎)
- ★自分の『いいところ』を話してもらって気持ちよく聴けましたか。 (◎)
- ★これから友達や自分の『いいところ』を見つけて、話したいですか。 (◎)

図 11

学習後の児童の感想から、「自分で読むより、友達に読んでもらうのはうれしい」「自分のいいところをもっと知れてうれしい」「友達と自分のいいところを伝え合って、とてもすっきりした」などが上がった。自分のいいところを伝えた合う活動を通して、自己理解、自己受容が育成し、さらに他者理解に繋がった。児童は互いに認め合う雰囲気を感じ取っている。

VIII 仮説の検証

本研究では、確かな児童理解を図るため、自己肯定感測定シートを活用することで、指導、支援の方向付けに効果的であったか、また、構成的グループ・エンカウンターを活用した指導計画の工夫と活用を行うことで、自己肯定感の育成に繋がったかを、自己肯定感測定シートの調査結果や振り返りシートの記述、児童の自己評価、感想、変容等から検証していく。

1 具体仮説(1)の検証

児童一人一人の実態調査を行う場において、自己肯定感測定シートを作成、及び活用することで、より確かな児童理解ができ、指導・支援の方向付けができるであろう。

具体仮説(1)では、自己肯定感に関する児童理解とその後の指導・支援の方向付けについて、自己肯定感測定シートの結果から分析、考察し検証する。

(1) 学級全体の把握

① 傾向と分析

自己肯定感測定シートの集計結果から、学級全体の自己肯定感の傾向が以下のように見られた。

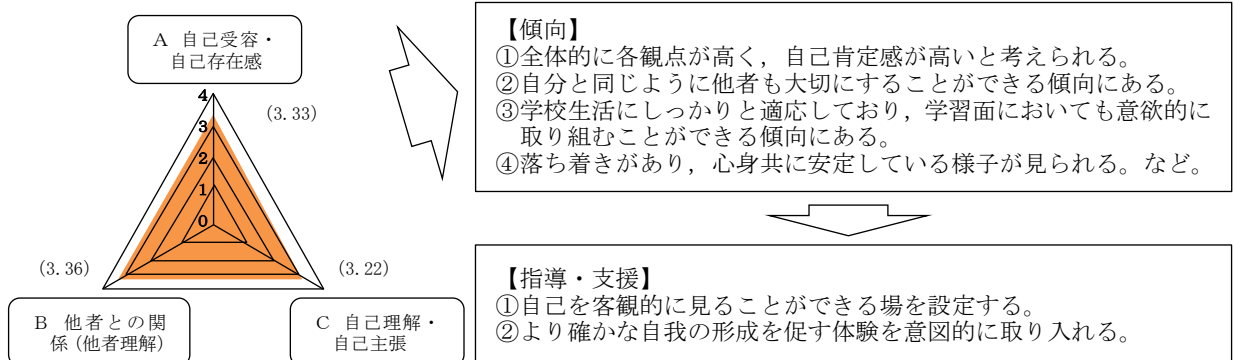


図 12 学級全体の傾向と指導・支援の流れ

男女の3観点の平均を比較すると、「A自己受容・自己存在感」と「C自己理解・自己主張」の2観点において、男子のほうが高い値を示し、「B他者との関係（他者理解）」においては、女子

のほうが高い値を示した。その中でも特に、「自分を理解してくれている人への気付き」や「他者への感謝する気持ち」の項目においては、女子の全員が最も高い値を示した。しかし、男女間の各観点に大きな差は見られない。その結果、男女間では自己肯定感の差はないと考える。

次に、3観点の中で、わずかではあるが、「C自己理解・自己主張」の観点に落ち込みが見られた。これは、男女とも同じように3観点の中で最も落ち込んでおり、値が2点台の児童が最も多かった。特に、女子においては、男女通してどの観点よりも最も平均の落ち込みが見られた。これは、学級の最優先に対処すべき課題である。

さらに、気になる児童として、K君の存在に着目した。K君は、学級の中で唯一、3観点すべて2点台の児童である。「C自己理解・自己主張」に関しては、学級において最も低い値を表した。

3観点それぞれの人数分布においては、3観点すべてにおいて、学級の平均値以上の児童が半数以上である。「A自己受容・自己存在感」は11名、「B他者との関わり（他者理解）」は10名、「C自己理解・自己主張」は13名（学級全児童20名）である。学級全体の指導としては、自己肯定感が高い児童の指導・支援を行いながら、自己肯定感の低い児童との交流の場を多く持てるような場の工夫に重点を置き、グループの組み方等を考慮した指導計画を考える必要がある。

また、「C自己理解・自己主張」に関しては、3観点の中で平均値以上の児童が13名と最も多い人数である。しかし、3観点中の平均値においては、最も落ち込みが見られる観点である。これは、この観点において高い児童と低い児童が存在し、二極化が原因だと考える。先ほども述べたように「C自己理解・自己主張」においては、やはりこの学級の最優先の課題である。自己肯定感の高い児童から低い児童への自己肯定感の高め合いを考慮した児童同士の関係づくりの場を設定する必要がある。残りの2観点においても自己肯定感の高い児童と低い児童が半数ずつ存在する。やはり自己肯定感の高い児童低い児童、両者に向けた指導・支援が必要である。

② 指導・支援の方向付け

各観点において、学級の平均を基に自己肯定感の高い傾向にある児童と低い傾向にある児童に向けた指導・支援の方向付けを行った。以下の表において示すこととする（表4）。

表4 各観点の指導・支援表

3観点	高い傾向にある児童	低い傾向にある児童
「A自己受容・自己存在感」	・他者と協力する場面を設定し、自己を客観的に見つめることができるようにする。 ・他者のいいところに目を向けさせ協力して学校生活が送れることができるようにさせる。	・自分のいいところや個性に気付く場面を多くし、ありのままの自分を受け入れられるようにする。 ・自己への評価が高まるように、具体的な場面を捉え、褒めることで、自己の価値を肯定的に認められるようにする。 ・学校で取り組んだ児童の成果を、保護者に伝え、家庭でも褒める機会を設けてもらう。
「B他者との関係（他者理解）」	・自分の行動や判断に自信を持たせ、自分のいいところが感じられる場面や経験を増やすようにする。 ・他者と比較するのではなく、自分の目標の達成を目指すようにさせる。	・他者との関係の中で自分の存在の価値に気付かせる場面を設定し、周りの人の存在の大切さに目を向けさせる。 ・体験的な活動を通して、集団の中でみんなのために活動する楽しさ、喜びを体験させる。
「C自己理解・自己主張」	・みんなをリードしたい意欲を尊重し、責任感を持って役割を果たせるよう支援する。 ・友達との関わりの中で、自分の役割を果たしていることを実感できる場面をつくる。 ・同じ事柄でも、多くの様々な考え方が存在することに気付かせ、受け入れられるような場面を設定する。	・他者と比較するのではなく、自分なりの目標の達成を目指すように支援し、自分の考えを持って行動できるようにさせる。 ・自分で判断し、自分で決めることに自信を持たせ、好きなこと、得意なことに打ち込める場面を設定する。

上の表を基に、学校生活すべての場において意図的・意識的に教師が児童と関わることで自己肯定感の育成に繋がると考える。また、自己肯定感の育成を目指した指導計画を組み立てる際においても指導・支援の方向付けになると考える。

(2) 個別の把握

① 傾向と分析

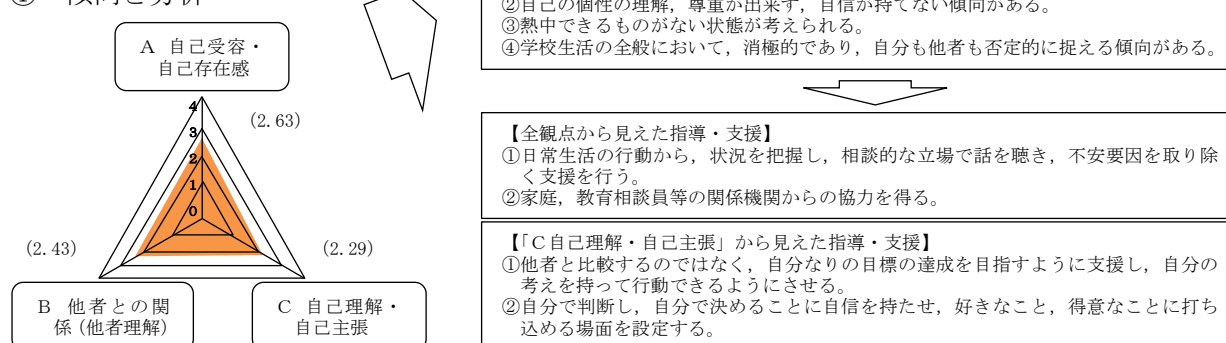


図13 個別の傾向と指導・支援の流れ

図 13 は、K 君の例である。3 観点すべてにおいて学級の平均値より下の児童である。そのことにより学級の中においては、自己肯定感が低い傾向にある児童であることが言える。また、「C 自己理解・自己主張」に関しては、学級の中において最も低い値である。この観点においては、先ほど述べた学級の最優先に対処すべき課題である。その中において最も低い値を示していることは、学級全体を始め、K 君の支援に早急に当たらなければならないと考える。

② 指導・支援の方向付け

指導・支援の方向性として、ア 児童の置かれている状況をしっかりと把握し、不安な要素を相談的な立場で聴き、取り除いてあげる支援をすること、イ 家庭、関係機関と連携し、協力を得ること、ウ 自信を持たせ、好きなことに打ち込める環境を作り、自己の目標の達成を支援すること、等を立て、指導・支援の方向付けを考えた。上記の方法で、学級一人一人の指導・支援の対策を立てる。さらに、自己肯定感測定シートの結果から集計された自己肯定感の実態を把握できるように児童の個表を作成する。教師が児童の自己肯定感を把握し、即時に意図的に指導・支援に当たることが出来る手立てとなると考える(図 14)。

以上のことから、児童の自己肯定感を把握し、より確かな児童理解を図ることにおいて、自己肯定感測定シートの活用は有効であったと考える。また、その後の指導、支援の方向付けを示すことにおいても効果的であったと考える。

2 具体仮説(2)の検証

学習計画において、構成的グループ・エンカウンターを活用した指導計画の工夫を図ることによって、自他のよさを知り互いに認め合い、自己肯定感の育成に繋がるであろう。

具体仮説(2)では、自己肯定感の育成について、構成的グループ・エンカウンターを活用した指導計画の作成とその計画に基づいた実践を行い、授業前後の自己肯定感測定シートの結果の比較や児童の振り返りシートの記述、変容から分析、考察し検証する。

(1) 指導計画の作成(実態把握より)

具体仮説(1)において、より確かな児童理解ができ、指導・支援の方向付けをすることが出来た。それらを基に、指導計画の作成を行った。学級の 3 観点の課題克服に向けた支援を網羅すること、また、各教科、領域等の学習内容と構成的グループ・エンカウターのねらいが関連していること、そして、エンカウターのエクササイズの配列・順序の原則に沿うこと、等を視点に指導計画を立てることとした。(報告書 28 ページに記載)

(2) 各観点到視点をあてた授業実践

自己肯定感測定シートの結果を反映した指導計画を活用し、授業実践を行った様子を以下に述べることとする。

①「A 自己受容・自己存在感」の育成に向けた授業展開

表 5 「A 自己受容・自己存在感」育成の授業展開

時	学習活動・内容・教科・領域	ねらい・指導上の留意点	評価規準と評価方法 ○評価規準・()は評価方法
10	12/12(水)6校時 【道徳】 「自分への手紙」 ・自己の成長に気づき、肯定的に評価することで学校生活への意欲を高める。 ①2学期前半にできるようになったことを書き出す。 ②自分にあげたい賞を選ぶ。 ③がんばった自分へ手紙を書く。 ④グループで読み合う。	・自分ができるようになったこと、努力していることに気づき、自分で自分を褒めることの楽しさを味わう。 【自己受容】 ①自分のめあてや行事に目を向けさせる。 ②同じことでもがんばった友達と相談したり、声をかけてあげる。 ③早くできた児童の手紙を読んであげてヒントにさせる。 ④早くできた児童はグループ以外の児童と交流をさせる。	【思考・判断・実践】 ○自分ができるようになったこと、努力していることに気付くことができる。 ○自分自身で褒めることの楽しさを味わう。 (ふり振り返りシートへの記述・分析)

この題材では、自分ができるようになったこと、努力したことに気づき、自分で自分を褒める活動を行った。自分への手紙と題して、書かせた(表 5)。

その結果、20 名全員が、「自分を褒めることはいいことだ」と答えた。「初めて自分に手紙を書



図 14 自己肯定感 個表

いて恥ずかしかったけど、いいことだなと思った」や「友達に手紙を書くよりすらすら書けた。気持ちがよかった」、中には、「すっきりした。言えなかったことや心のもやもやが取れてよかった」などの感想が見られた。また、「〇〇さんは、私が思っていない私のいいところを見つけていてすごいと思った」「〇〇さんは、私が思っている〇〇さんのいいところと同じことを書いていて、自分と同じことを考えているんだなと思った」等の記述も見られた。

これらのことから、自分の言動を自分で褒めることの楽しさを味わい、自分のことを認めること、また、学級の中で自分と同じ考えの人に気付くことで、自分の居場所を確認でき、学級の一員だと再確認でき、自己受容・自己存在感を育成することに効果的であったと考える。

②「B他者との関係（他者理解）」の育成に向けた授業展開

表6 「B他者との関係（他者理解）」育成の授業展開

時	学習活動・内容・教科・領域	ねらい・指導上の留意点	評価規準と評価方法 ○評価規準・()は評価方法
4	11/29(木) 6校時 【道徳】 「無人島 SOS」 ・みんなのいろいろな考えを知り、学級が個々の多様性を包み込んで成り立っていることを理解する。 ①生き延びるために必要な物を次の中から8つ選び、自分なりに順番を決める。 ②ペアになって話し合い、理由も添えて意見をまとめる。 ③答えは一つでないことを確認して、全体で質問し合う。 ④自分の意見を再検討する。	・自分の考えを説得的に友達に伝える。多様な考えのあることを知り、お互いを認め合う人間関係をつくる。 【自己理解・他者理解】 ①各自で記入させ、自分の意見で話し合いに参加させる。 ②メモに基づいてお互いの意見を十分に話し合わせる。 ③自分たちの意見に自信をもてるように支援する。 ④友達の見解も大切な意見として尊重し合えるような雰囲気づくりをする。	【思考・判断・実践】 ○自分の考えを知り、相手に伝えるための表現を考えることができる。 ○多様な考え方に気付き、お互いを認め合える人間関係を築くことができる。 (ふり返しシートへの記述・分析) (発言の確認)

この題材では、多様な考え方に気付き、お互いを認め合える人間関係を築くため、無人島を設定した。そこで生き延びるために必要な道具をペアやグループ、全体で話し合わすことで、他者理解を育成することとした(表6)。

その結果、「友達の考えを知って、気持ちを分かちあうことができましたか」の問いに、14名の児童ができたと言った。その中には、「同じ道具を持っていくのに理由が自分とちがっていて、考えは人それぞれなんだなと思った」また、「私が持っていない道具でも友達は持っていくと言った。考えはちがっていても理由を聞いて納得した。すごいと思った」「自分と同じ道具を持っていかない人でもグループで話し合えて、心がひとつになれた」等、持っていく道具の理由を述べ合い、話し合うことで、他者の考えに耳を傾け、自分の考えと照らし合わせながら、相互理解が図られたと考える。

残り6名の児童は、「どちらでもない」と答えた。振り返りシートの記述に「自分とちがうところもあるし、反対されるのもあるんだなと思った」と記述されていた。また、ある児童は、「〇〇さんは、自分の考えをはっきり言えてすごいと思った。自分は言えなかった」とあった。前者は、他者の考えを捉えることが出来たと感じたが、反対されることによりうまく他者の考えを捉えることが出来なかったと捉えている。後者は、他者の考えを理解することが出来ない上に、自分の考えもまとまらず、述べる事が出来なかったと考えられる。やはり、他者との関係の中だけで相互理解を図ることは難しいと考える。あとの2観点も絡めながら、多様な視点からの授業の組み立てが今後の課題だと感じる。

③「C自己理解・自己主張」の育成に向けた授業展開

表7 「C自己理解・自己主張」育成の授業展開

時	学習活動・内容・教科・領域	ねらい・指導上の留意点	評価規準と評価方法 ○評価規準・()は評価方法
9	12/11(火) 2校時 【学級活動】 「言葉で伝えよう～みんなのいいところ～」 ・お互いのよい所を認め合う体験をする。 ①1グループ4人を作る。 ②友達のよい所を記入する。 ③友達が書いてくれた自分のよい所を伝え合う。 ④感じたことを発表し合う。	・友達が見つけた自分のよさを知り、受け入れられることを喜び、味わう。 【自己理解・自己主張】【自己受容・自己存在感】 ①広告紙を使用し、組み合わせることで、グループが完成することを知らせる。 ②あらかじめ一人一人のよさを用意しておき、見つからない時にヒントを与える。 ③きちんと友達を見て読んであげるように指示。 ④よい所を見付けてもらうのは気持ちがよい。見付けてあげた友達が喜ぶと自分もうれしいことを感じさせる。	【関心・意欲・態度】 ○自分のよい所を知り、受け入れられる喜びを味わうことができる。 (行動の観察・発言の確認) (ふり返しシートへの記述・分析)

この題材では、友達が見つけた自分のよさを知り、みんなに受け入れられる喜びを味わう活動を行った。その中で、友達が書いてくれた自分のよい所をお互いに発表させ合った(表7)。

その結果、20名全員が「自分のいいところを見つけることができた」「友達のいいところを話

すことができた」と答えた。「自分が思っていたいいところと同じでした」「自分にはわからなかったいいところも言われて分かることができた」「自分はいいいところが少ないと思っていたけど、友達からいいところをいっぱい書いてもらって、こんなにあるんだなと思った。うれしかった」などの記述が多く見られた。また、「友達のいいところを話すと、少しはずかしかったけど、すっきりした」「うれしい気持ちになりました。また、みんなの顔がニコニコして、とてもうれしそうでした」等、友達のよさを話してあげることで、自分の考えを話すことの心地よさを味わうことが出来たと考える。

これらのことから、友達のよさを見つけ合い、自分のいいところも見つけてもらう活動を通して、お互いに発表し合うことで自己の理解に繋がり、自己主張の育成にも効果的であったと考える。

(3) 自己肯定感測定シートの変容

① 学級全体について

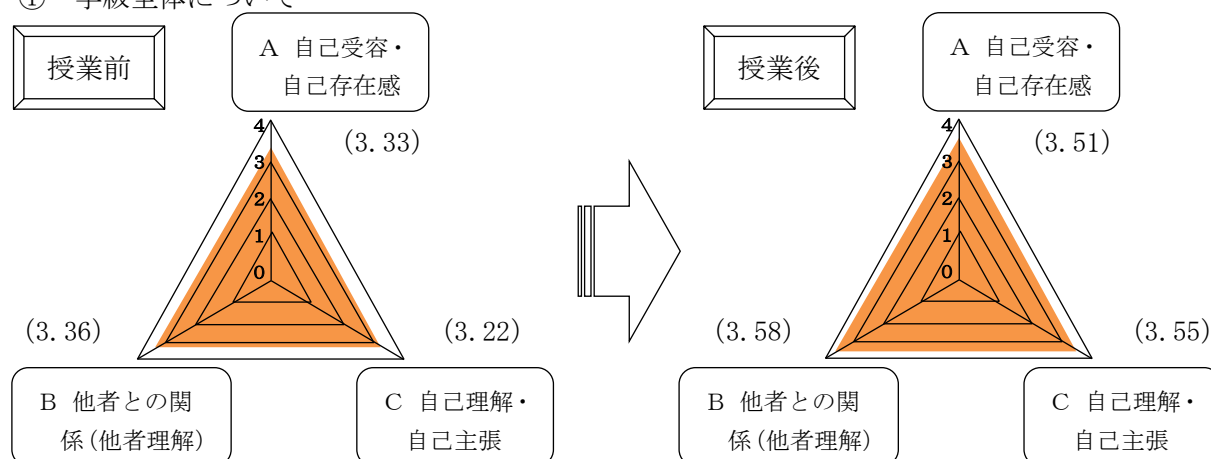


図 15 学級全体の授業前後の比較

図 15 は、学級全体の自己肯定感測定シートの授業前と授業後の結果である。全観点において上昇が見られ、平均して 0.24 ポイント（6％）とわずかなではあるが増加が見られた。また、3 観点において、最も落ち込みが激しかった「C 自己理解・自己主張」の観点においても上昇が見られ、3 観点の中において最も低い値ではなくなり、改善が見られた。上昇率の視点から見ても、0.33 ポイント（8.25％）と 3 観点中一番の上昇を示した。その中において、最も落ち込みが見られた女子の値も 0.4 ポイント（10％）と、各観点の中において一番の上昇である。質問項目の「あなたには誰にも負けないもの・ことがある」「みんなが違うことを言っても、自分の意見をはっきり言える」の 2 つの項目において特に高い値を示した。

これらは、指導計画を作成するにあたり、自己肯定感測定シートを基に児童の実態を捉え、そこで見てきた課題点・改善点の克服に向けた指導計画の工夫がしっかりと出来た結果だと考える。そのことにより、学級の最優先に対処すべき課題であった観点の改善に繋がったと考える。

② K 君について

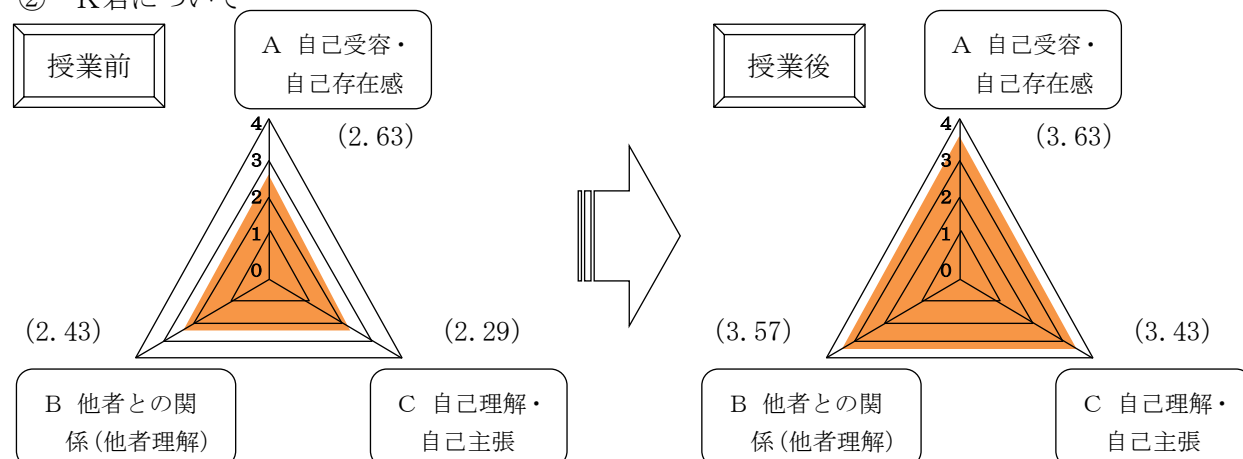


図 16 K 君の授業前後の比較

図 16 は、K 君の自己肯定感測定シートの授業前と授業後の結果である。全観点において上昇が見られ、全て 3 点台を示し、学級平均と同値を示した。その中の「A 自己受容・自己存在感」に関しては、学級の平均を 0.12 ポイント（3%）上回った。また、学級において最も低い値であった「C 自己理解・自己主張」に関しても 3.43 と 1.14 ポイント（28.5%）上昇し、「B 他者との関係（他者理解）」と並んで上昇率が最も高い値を示した。「C 自己理解・自己主張」の質問項目の「あなたは、自分のよい所も悪い所もよく分かっている」「みんなが違うことを言っても、自分の意見をはっきり言える」「あなたは自分の決めたことや行動を信じることができますか」の項目において高い値を示した。

これらは、教師が本人の学級での位置、友達との交流状況をしっかりと把握し、授業のにおいて意図的にグループ形成を行うこと。また、自分の意見・考えに自信を持ち、得意なことに打ち込める場面やペアの設定を行う際の意図的な配置等、構成的グループ・エンカウンターの要素を意識しながら、各教科、領域に取り入れ、計画的に指導計画を作成し取り組んだためだと考える。

以上のことから、構成的グループ・エンカウンターを活用した指導計画の工夫を図ることは、自己肯定感の育成に効果的であったと考える。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) より確かな指標として、自己肯定感測定シートを作成・活用することで、教師のこれまでの学級の実態把握や児童理解に加え、さらに客観的、多面的な視点で捉えることができた。また、その結果を踏まえ、自己肯定感の育成に向けた指導・支援の方向付けに繋がった。
- (2) 学級の実態を考慮し、構成的グループ・エンカウンターを活用した指導計画を工夫したことにより、学級内の温かな人間関係が築かれ、信頼関係が深まり、互いのよさを認め合い、自己肯定感の育成に繋がった。
- (3) 振り返りシートを工夫し自分を振り返らせることで、自分のよさに気づき、自己を肯定的に受けとめることが出来る手立てとなり、自己を客観的に受けとめる良い機会となった。
- (4) 授業後の自己肯定感測定シートの値が下がってしまった項目もあるが、今回の検証授業を行うことで自分を見つめ、自分のことを意識して見るようになったことや学級内の友達関係への新しい気づきが相互に生まれ、新しい関わりを作り始め、相互理解を図るきっかけになった。

2 課題

- (1) 自己肯定感測定シートは、一定の効果が見られたが、より確かな児童理解を行うために、3つの観点と質問項目との繋がりに改善が必要である。また、今回は11月と12月に実施した。とても短期間であり、長期的な児童の変容が図られない。そのため、定期的な実施を行うことが必要である。
- (2) 指導計画を作成するにあたり、短期に集中して行ったため、エクササイズをめあての急激な変化に戸惑いを感じる児童が見られた。指導計画を児童の構成的グループ・エンカウンターへの適応も考慮しながら段階的に立てる必要がある。
- (3) 各教科・領域、学校行事と家庭・地域との関連性をより持たせた指導計画の作成を行い、年間を通して継続的な実施が必要である。

〈主な参考文献・引用文献〉

- ・東京都教職員研修センター 2011 『子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【基礎編】』、『自己評価シート』
http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/information/kenkyuhoukoku_kiyou/houkoku22.html
- ・大坊郁夫 2006 『コミュニケーション・スキルの重要性、日本労働研究雑誌, No. 546』 労働政策研究・研修機構
- ・諸富祥彦 2000 『自分を好きになる子を育てる先生』 図書文化
- ・國分康孝監修 1999 『ソーシャルスキル教育で児童が変わる』 図書文化
- ・國分康孝監修 1996 『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』 図書文化